

# 言葉を換える・見方を換える

留学生別科長 虫賀 文人

今年、大野萌子氏の『言いかえ図鑑』という本がベストセラーとなった。この本は、普段使っている言い方をよい方向に変えて人間関係を改善するための手引き書といえる。

本の中で紹介されている実例を1つ挙げる。学校から帰宅した子どもに「今日学校楽しかった？」と声をかけしてしまうと、子どもは「楽しかった」という答えを求められていると感じ、イヤなことがあっても話すことを躊躇してしまうものである。そこで、大野氏は、このような「はい」か「いいえ」かの答えを促す「クローズドクエスチョン（閉ざされた質問）」ではなく、「学校どうだった？」というような「オープンクエスチョン（開かれた質問）」で聞いた方がよいと言うのである。「どう？」はニュアンスもやわらかく、相手に話したいことを選択してもらえ、とても便利な言葉といえる。

今年度、留学生別科では、コロナウィルスの感染拡大が進む中、授業の大半をオンラインで行うことになったが、対面の授業であれば伝わるのが、オンラインでは十分に伝わらないことも多々あった。一方で、私たちが普段、使っている言葉を意識して、よりわかりやすい言葉に言い換えることで、オンラインの中でも伝えられるようになるということを学ぶこともできた。

この言葉の言い換えについて、もう少し例を挙げてみる。あいまいな表現ではなく具体的に話す（「ちょっと考えてください」ではなく「3分間考えてください」）、否定語ではなく肯定語を使って話す（「廊下を走るな」ではなく「廊下はゆっくり歩こう」）、一文一動詞で話す（「教科書の24ページを開いたら問題番号の2番を見てください」ではなく「教科書の24ページを開きましょう。次に問題番号の2番を見てください」）などである。こうした言葉の言い換えとともに、学生に対する見方を換えて学生の味方になってあげることが大切といえる。たとえば、すぐにあきらめる学生がいれば、「切り替えが早いね、さっぱりしているね」とリフレーミングするということである。

このように、自分が言われて心地よい言葉を相手に使えば、相手からの反応も変わってくるし、相手も他者から丁寧に接してもらえたり認めてもらえたりする経験を通して、おのずと自分のことを認められるようになるのである。こうした自己肯定感を持つことこそ幸せに生きるための原動力といえる。

さて、この度、留学生別科紀要第19号を発刊する運びとなった。ここで発表された論文には、新しい見方や考え方のヒントになるものが数多く詰め込まれている。ぜひ熟読していただき、明日からの教育実践に活かしていただければ幸いである。